氏　名	小川　敦（教授）
こんな研究をしています	社会言語学、特に多言語社会であるルクセンブルクについて長年研究しています。ルクセンブルクはドイツ語の一変種を独自の言語「ルクセンブルク語」として作り上げつつ、フランス語とドイツ語を併用する社会であり、また人口の約半数が外国籍という複雑な社会です。多言語教育政策とそれにともなう社会的格差や課題について研究しています。
こんな成果を挙げています	・小川敦（2025）「ルクセンブルクを代表する言語とは何か ―移民による社会の多言語化と国語としてのルクセンブルク語の位置づけ―」、『ことばと社会』、三元社 21～44 頁。 ・小川敦（2025）「ルクセンブルクの初等教育におけるフランス語識字教育の導入について（研究ノート）」、阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』66 号、53～64 頁。 ・小川敦（2022）「「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」、ドイツ文法理論研究会『エネルゲイア』47 号、29～50 頁。 ・小川敦(2021)「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」、柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁（編著）『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』、三元社、37～66 頁。 ・大澤麻里子・小川敦・境一三（2020）「イタリア・南チロルにおける CLIL －ドイツ語系学校への導入を巡って－」、日本言語政策学会『言語政策』16 号、29～52 頁
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	私個人としてはルクセンブルクの研究を長年行ってきましたが、共同研究ではイタリア・南チロルや、フランス・アルザス、スイス・バーゼル市の言語（教育）政策なども扱ってきました。ドイツ語圏やヨーロッパの研究が多いですが、それに限定せず、移民などの言語的なマイノリティの権利や言語教育など、社会と言語の関係や言語政策に広く関心を持っています。
こんな授業を行なっています	多文化相関論ⅡA・B 授業では言語と教育、格差、権利、言語政策について、主に多言語社会や移民社会の視点から考えます。そのために文献を読み、議論していきます。複数の言語変種が用いられる社会、また外国語として言語を学ぶ社会、言語的なマイノリティの住む社会等を広く多言語社会として捉えて考察します。日本の国内外の事例を視野に入れていきます。
学会や社会でこんな活動をしています	日本独文学会において語学ゼミナールの実行委員、機関誌編集委員を、阪神ドイツ文学会においても機関誌編集委員をつとめています。以前はドイツ文法理論研究会にて編集委員、阪神ドイツ文学会で研究発表会やシンポジウムを企画する企画幹事、日本言語政策学会では年に 1 度行われる研究発表大会の企画を担う大会委員会に加わっていました。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	他者、そして自己の言語や文化的な多様性を客観的に理解し、尊重し、言語化していく力を持つ人。そのための努力を常に惜しまない人。大学院生のみなさんにそうであってほしいと願いますし、私もそうありたいと思います。